

『ゴーラクナート語録』 研究

——「サブディー」(151-276)の本文と和訳——

橋 本 泰 元

はじめに

本稿は『東洋学論叢』第34号の拙稿に引き続いて、Pitāṃbaradatta Barāthvāla, *Gorakha-Bānī*, Prayāga: Hindi Sāhitya Sammelana, 2017 (=1960, tritīya saṃskaraṇa) [prathama saṃskaraṇa 1942] 所収の、ゴーラクナートによる教説の二行詩サブディー (sabadī) 全189偈 (主要テキストである写本 a 以外の写本にあるサブディーを加えると276偈) のうち第151偈から最後まで本文と和訳を提示するものである。

なお、前号と同様に、訳文中の () は筆者の言い換え、[] 内は筆者による補足を、* は筆者の訳注を示す。

本文と和訳

avadhū būjhanā te bhūlanā nahīm̐ anabūjha maga hārai /
 sūṃne jaṅgala bhaṭakata phirahīm̐ māri lihīm̐ baṭamārai // 151 //

遁世者よ、覚知した者は忘れることはない、覚知していない者は道を誤る。

人気のない荒野でさまよい歩き、追いはぎが〔かれらを〕捕らえ殺す。

guru kī bācā ṣojaim̐ nām̐hiṃ̐ ahaṃkāri ahaṃkāra karai /
 ṣoji jīvaim̐ ṣoji gurū kauṃ̐ ahaṃkāri kā pyaṇḍa parai // 152 //

導師のこばを求めずに、傲慢な者は見栄を張る。
 導師を求める者は生命を得、傲慢な者の肉体は朽ちる。

(2)

yandrī kā laḍabarā jibhyā kā phūhaṛā goraṣa kahai te partṣi cūharā /
kācha kā jaṭi muṣa kā satī so sata puruṣa utamo kathī // 153 //

〔生殖〕器官がだらしく、舌で無駄口をたたく者は、ゴーラクは言う、
その者はほんとうに卑しい者。

禪を締め真実を語る、そのほんものの男は、最上と言われる。

avadhū mana caṅgā tau kaṭhautī hī gaṅgā bāndhyā melhā tau
jagatra celā /

badanta goraṣa sati sarūpa tata bicāraiṃ te reṣa na rūpa // 154 //

遁世者よ、心が良ければ〔乞食用の〕椀はガンガー川のように、〔マーヤー

に〕捕らわれた者（個我）を救えば、世界が弟子〔となろう〕*。

ゴーラクは真実の本質を説く、線も形もないものを熟考せよと。

*この第1行の訳は、原著者の解釈に従っている。前半句は「心が清
浄ならば、何時いかなる所でも聖河ガンガーを念想できる」ほどの
意味である。後半句原文の動詞 melha-の意味は *Hindī-śabda-sāgara*
によれば「放っておく」あるいは「もがく」の意味であるが、前半
句との文脈上の整合性を考えれば、上記のような和訳が妥当と思わ
れる。

sīṣi sāṣi bisāhyā burā supinaiṃ maiṃ dhana pāyā paṛā /

paraṣi paraṣi le āgaiṃ dharā nātha kahai pūtā ṣoṭā na ṣarā // 155 //

教わって悪い物を買ひ、夢のなかで富を得たと思う。

前にもってきて良く見よ、ナートは言う、息子よ〔それは〕偽物でも本
物でもない。

āo debī baiso dvādisa aṅgula paiso /

paisata paisata hoi suṣa taba janama marana kā jāi duṣa // 156 //

来い、女神よ、座れ、12指〔の長さ〕に入れ。*

入っている間に楽となろう、そうすれば生死という苦はなくなる。

*この行の「女神」はクन्दリニーを、そして「12指」は、頭頂から

12指の幅分の上に想定されている第6のチャクラである千弁の蓮華
サハスラーラ・チャクラの意味と考えられる。

svāmmī kācī bāi kācā jinda kācī kāyā kācā binda /
kyānkari pākai kyūmkari sijai kācī aganiṁ nīra na sījai // 157 //
主よ、氣息が未熟で、生が未熟で、身体が未熟で、ビンドウが未熟だ。
どうしたら熟すであろうか、どうしたら成就するか、弱い火では水は沸
かない。

tau debī pākī bāi pākā jinda pākī kāyā pākā binda /
brahma agani aṣaṇḍita balai pākā aganiṁ nīra parajalai // 158 //
女神よ、その時氣息は完成し生は完成する、身体が完成しビンドウが完
成した〔とき〕。
ブラフマンの火が不断に燃え、強い火で水は沸騰する。

sovata aḍam̐ ūbhām̐ ṭhāḍhām̐ aganiṁ byanda na bāi /
niścala āsana pavanām̐ dhyānām̐ aganiṁ byanda na jāi // 159 //
寝て横になり〔あるいは〕 豎に立っていても、〔ブラフマンの〕 火ビン
ドウはできない。
坐位、調息、静慮が不動となれば、〔ブラフマンの〕 火とビンドウは壊
れない。

ugavanta sūra partra pūra kālakaṇṭaka jāi dūra /
nātha kā bhaṇḍāra bhara pūra rijaka rojī sadā hajūra // 160 //
太陽が昇り、〔木々の〕 葉が広がれば、時〔という〕 の棘が遠のく。
ナート（主）の蔵が満ちれば、毎日の食物は常にある。

thāmna māṁna gura gyāmna bedhām̐ bodha sidhām̐ paragrāmna /
cetani bālā bhrama na bahai nātha kī kṛpā aṣaṇḍita rahai // 161 //
境地〔が定まれば〕 誇りと導師の智慧〔が得られ〕、〔クンダリーニーの〕
貫通〔によって〕 の覚知〔が得られ〕 成就者は他の村〔の住人とな
る〕。*

(4)

覚知〔という〕子供は誤謬に流されず、ナートの恩寵は不断にある。

*この行の意味は、動詞がないために原著者の解釈にしたがっても理解しにくい。最後の四半句の意味は、原著者の解釈に従えば、成就者たちは無執着の状態となることである。

adhika tatta te gurū beliyē hīṁṇa tata te celā /
mana māṁnaim tau saṅgi ramau nahīm tau ramau akelā // 162 //
多くの真実〔の知識〕があれば導師と呼ばれ、劣った真実〔の知識しかなければ〕弟子〔と呼ばれる〕。*

心が望めば〔導師と〕ともに過ごし、そうでなければ一人で過ごせ。

*第1行原文の beliyē の語幹 bel-は「(パン類を)捏ねる」の意味だが、意味が通じない。ここでは boliyē と読んだ。

calanta panthā tūṭanta kanthā uḍanta ṣehā bicalanta dehā /
chūṭanta tāklī hari sūṁ nehā // 163 //
道を歩めば衣は破れ、埃が立ち上れば身体はよろめく。
神への愛(信愛)〔を讃える〕拍手も止む。*

*原著の注に依れば、底本の写本に第2行目後半句が欠けている。

panthi cale cali pavanām tūṭai nāda binda aru bāi /
ghaṭa hīṁ bhīṁtari aṭhasaṭhi tīratha kahām bhramai re bhāi // 164 //
道を歩めば調息が乱れ、ナーダ、ビンドゥッそして氣息が壊れる。
身体の内側に68の聖地があるのに、どこをさ迷うのか、兄弟よ。

jogī hoi para nindyā jhaṣai mada māṁsa aru bhāṅgi jo bhaṣai /
ikotarasai puriṣā narakahi jāi sati sati bhāṣanta śrīgoraṣa rāi // 165 //
ヨーガ行者でありながら、他人を非難し、酒、肉そしてタイマを食べる。
〔そのような〕101人のひとは地獄に行く、聖ゴーラク王は真実のみを語る。*

* 「101」は満数を表す。

avadhū māṃsa bhaṣanta dayā dharama kā nāsa mada pīvata
 tahāṃ prāṃṇa nirāsa /
 bhāṅgi bhaṣanta gyāṃṇa ṣovanta jama darabārī te prāṃṇīm
 rovanta // 166 //

遁世者よ、肉食すれば憐憫の法が壊れ、飲酒すれば生類は希望を失う。
 タイマを食すれば知恵を失い、ヤマ（閻魔）神の法廷で泣く。

cālibā panthā kai sīmbā kanthā dharibā dhyāṃṇam kai kathibā
 gyāṃṇam /
 ekāekī sidha kai saṅga badanta goraṣanātha pūtā na hoyasi mana
 bhaṅga // 167 //

道を歩むか衣を縫うべし、禪定を保つか知恵を語るべし。
 独りで〔いるか〕成就者とともに〔いるべし〕、ゴラクナート〔は語る〕息子よ、心の乱れはないと。

parhi dekhi paṇḍitā brahma giyāṃṇam mūvām mukati baikunṭhā
 thāṃṇam /
 gāḍyā jālyā caurāsī maim jai satisati bhāṣanta goraṣarāi // 168 //
 パンディットよ、ブラフマンの知識を学んでよく見よ、死者は解脱しバ
 イクンタ天に居所〔を得ると人は言う〕。
 〔けれども〕〔土に〕埋められ〔火に〕焼かれ84〔0万のヨーニ〕に行
 く、ゴラク王は真実を語る。*

* 「840万のヨーニに行く」は、輪廻転生の常套句。

ākāsa tata sadā siva jāṃṇa tasi abhiantara pada nirabāṃṇa /
 pyaṇḍe paracāṃṇaim guramuṣa joi bāhuḍī ābā gavana na hoi // 169 //
 空界を永遠のシヴァと知れ、その中に涅槃の境地がある。
 肉体の中で〔それを〕覚知せよ、導師の御口から〔それを〕得よ、〔そ
 うすれば〕再び去来（転生）はない。

(6)

ūrāma dhūrāma jvāla joti suraji kalā na chīpai choti /
kañcana kavala kiraṇi parasāi jala mala duragandha sarba suṣāi //
170 //

深い暗闇に光が輝き、太陽は〔16カラーの〕月を触れて隠さない。
金色の蓮華を〔その〕光線が触れ、水・垢・臭すべてを吸いとる。*

*第1行目の後半句の意味が判然としない。原著者は原文 suraji kalā
を (Skt.) sūryakalā と複合語に解釈しているが、それでも意味が不
明である。第2行目の「金色の蓮華」を原著者は頭頂に想定されて
いるサハスラーラ・チャクラと解釈しているが、この行の意味も判
然としない。

ghaṭi ghaṭi sūṇyāṁ gyāṁna na hoi bani bani candana rūṣa na koi /
ratana ridhi kavana kai hoi ye tata būjhai bbiralā kōi // 171 //
体ごとに聴聞によって知識は生ぜず、〔あたかも〕森ごとに白檀の樹が
ない〔ように〕。

宝や神通力が誰に得られようか、この真実は稀なる人が理解できる。

nīmjhara jharaṇaiṁ aṁmīmrasa pīvaṇāṁ ṣaṭa dala bedhyā jāi /
canda bihūṇāṁ cāṇḍiṇāṁ tahāṁ deṣyā śrī goraṣarāi // 172 //
豊富な水の滝で甘露が飲める、六輪のチャクラが貫通されれば。
月がなく月光〔があるところ〕、それを聖ゴーラク王は見た。

kai mana rahai āsā pāsa kai mana rahai parama udāsa /
kai mana rahai gurū kai olai kai mana rahai kāṁmani kai ṣole //
173 //

あるいは心は期待という絹索に捕らわれており、あるいは心は至高の離
欲〔の境地〕にある。

あるいは心は導師の庇護の許にあり、あるいは心は愛人の胸にある。

dābi na māribā ṣālī na rāṣibā jāṁnibā agani kā bhevāṁ /
būdhī hīm thai girabāni hōigī sati sati bhāṣanta śrī goraṣa devāṁ

// 174 //

〔心を〕抑え付けて苦しめてはいけない、虚ろにしてはいけない、〔ブラフマンとヨーガの〕智火の区別を知らなければならない。
古潭こそから導師のことが生まれる、真実の真実を語る聖ゴーラク天は。

bāhari na bhītari neṛā na dūra ṣojata rahe brahmā aru sūra /
seta phaṭaka mani hīraiṁ bīdhā ihi paramāratha śrī gorāṣa sīdhā //
175 //

〔至高の真実在は〕外にも内にも近くにも遠くにもなく、ブラフマー神とスーリヤ神は探し回った。
白水晶を金剛石が貫いた、この最高の意義を聖ゴーラクは直証した。

āvati pañca tata kūṁ mo hai jāṭi chaila jagāvai /
gorāṣa pūchai bābā machindra yā nyandrā kahāṁ thaim āvaim //
176 //

やって来る五大〔要素〕（身体）の意識をなくし、立ち去る意識を覚醒させる。*
ゴーラクは訪ねる、尊師マチンドラよ、このような睡眠はどこから来るのかと。

*後半句の「意識」と訳した原語 chaila の原義は「粹人」の意味だが、原著者の解釈に従った。

gagana maṇḍala maim ṣuṁni dvāra biljalī cammakai ghora andhāra /
tā mahi nyandrā āvai jāi pañca tata maim rahai samāi // 177 //
虚空界（サハスラーラ・チャクラ）に空の門（ブラフマン孔）があり、
電光が輝く、漆黒の暗闇に。
その中から睡眠が去来し、五大（身体）に帰入する。

ūbhāṁ baiṭhāṁ sūtāṁ lijai kabahūṁ cita bhaṅga na kījai /
anahada sabada gagana maim gājai pyaṇḍa paṛai to satagura lājai

(8)

// 178 //

行住坐臥〔常にその音声を〕聴くべきなり、決して心を乱すべきではない。

奏でられざる音声は虚空界に鳴り響き、肉体が崩れれば正師は恥じ入る。

ekalau bīra dūsarau dhīra tīsarau ṣaṭapaṭa cauthau upādha /
dasa pañca tahāṁ bāda bibāda // 179 //

独りの勇者、二番目は忍耐強き者、三番目は喧嘩好き、四番目は厄介者。
5人10人そこに〔集まれば〕、喧しい口論〔が始まる〕。

ekāekī sidha nāmūṁ doi ramati te sādhavā /
cāri pañca kuṭumba nāmu dasa bīsa te lasakarā // 180 //

独りで居る者の名前がスイツダ（成就者）、二人で居ればサードゥー
（修行者）。

4, 5人で居る者の名前が家族、10人、20人で軍隊。

mana muṣi jātā gura muṣi lehu lohī māsa agani muṣi dehu /
māta pitā kī meṭau dhāta aisā hoi bulāvai nātha // 181 //

心に向いている〔性向〕を導師に向け、血と肉（身体）を〔ブランフマンの〕智火に向けよ。

母父の要素を消せ、このような者をナートは〔自分の近くに〕呼び寄せる。

nāda nāda saba koi kahai nādahiṁ le ko biralā rahai /
nāda binda hai phīkīsilā jihim sādhyā te sidahiṁ milā // 182 //

ナーダ、ナーダと皆が言う、〔しかし〕ナーダに帰入した者は稀なり。
ナーダ・ビンドゥは色褪せた石版〔のよう〕、〔しかし〕それを行じた者は、成就を得た。

daravesa soi jo darakī jāṁṇaim pañce pavana apuṭhām āṁṇai /
sadaḥ suceta rahai dina rāti so daravesa alaha kī jāti // 183 //

ダルヴェーシュ（イスラーム神秘修行者）とは法門を知り、5種〔の感

官] と氣息を抑制している。
常に、昼夜、意識が目覚めている、そのようなダルヴェーシュはアッラー
と同類の者なり。

baisam̐ta pūrā ramanti sūrā eka rasi rāṣanti kāyā /
antari eka rasi deṣibā bicaranti goraṣarāya // 184 //
勇者はゆったりと坐り、身体を一樣（不動）に保つ。
ゴーラク王は、内部に同一性を得ようと歩き回る。

nāda binda bajāile doū pūrile anahada bājā /
ekantikā bāsā sodhi le bharatharī kahai goraṣa machindra kā dāsā
// 185 //
ナーダ・ビンドゥの二つを鳴らせ、奏でられざる音という楽器を吹け。
静寂な独居を探せ、バルタリーよと、マチンドラの弟子ゴーラクは言う。*

*バルタリーの原語 bharatharī < (Skt.) bhārth̐hari

sūra māhim̐ canda canda māhim̐ sūra capampi tīni tehuṛā bājala
tūra /
bhaṇanta goraṣanātha eka pada pūrā bhājanta bhaumdū sādhan̐ti
sūrā // 186 //
太陽の中に月が、月の中に太陽があり、三〔要素〕が抑えられ角笛が鳴っ
た。*
ゴーラクナートは語る、〔このように〕一つの境地が満足されるが、愚
者は〔それから〕逃れ、勇者は〔それを〕修すると。

*原著者の解釈によれば、太陽はピンガラー脈管を、月はイラー脈管
を意味し、三要素は三グナを、また角笛は「奏でられざる音」を意
味する。

chatra pavana nirantara rahai chījai kāyā pañjara rahai /
mana pavana cañcala niḥi gahiyā bolai nātha nirantari rahiyā // 187 //

(10)

天蓋の氣息がつねに通ってれば、身体は瘦せて骸骨だらけになる。＊
落ち着きのない心の氣息を自ら抑えれば、ナートは言う、〔身体の〕動
作は安定する。

＊「天蓋」とは、頭頂のサハスラーラ・チャクラのことと思われる。

ikaṭi bikuṭi trikuṭi sandhi pachima dvāre pavanāṁ bandhi /
ṣūṭai tela na būjhai dīyā bolai nātha nirantari hūvā // 189 //
第1（イラー脈管）と第2（ピンガラー脈管）が第3（中央のスシュム
ナー脈管）に合すれば、西門で氣息は止まる。＊
油が止まらなければ灯火は消えず、ナートは言う、〔そのように修行者
は〕恒常になる。

＊後半句の意味が判然としないが、原著者は、「スシュムナー脈管で氣
息が抑制される」と解釈している。

ḥyūṁ ḥyūṁ bhuyaṅgama āvai jāi surahī ghari nahim̄ garāra rahāi /
taba laga sidha dulamba joga toyam̄ ahāra bina vyāpai roga // 190 //
毒蛇が行き来して、雌牛の小屋にガルラ鳥は住まないように。
ヨーガの完成は困難となり、水・食物を摂らずに病がひろがる。

gyāmna sarīṣā gurū na miliyā citta sarīṣā celā /
mana sarīṣā melū na miliyā tīthaim̄ goraṣa philai akelā // 191 //
智慧に等しい導師が得られず、心に等しい弟子が得られなかった。
意のごとき友が得られず、それ故、ゴーラクは独りめぐり歩く。

sāṅga kā pūrā gyāna kā ūrā peṭa kā tūṭa ḍimbha kā sūrā /
badanta gorakhanātha na pāyā joga kari pāṣaṅḍa rijhāyā loga // 192 //
肢体は満足でも知恵は僅か、腹は空っぽでも見栄を張る。
ゴーラクナートは語る、〔そのような者は〕ヨーガ〔の成就〕を得ず、
詐偽をなして世間を喜ばす。

agani hīṁ joga agani hīṁ bhoga agani hīṁ harai caum̐saṭhi roga /
 jo ihi agani kā jāṇai bheva so āpa hī karatā āpa hī deva // 193 //
 [ヨーガの] 火こそがヨーガ（抑制）であり，火こそが享受であり，火
 こそが64種の病を払う。

この火の秘密を知る者は，自らが動作者であり神である。

jīvatā jogī amīrasa pīvatā ahanisa aṣaṇḍita dhāraṁ /
 diṣṭi madhe adiṣṭhi bicāribā aisā agama apāraṁ // 194 //
 生前解脱したヨーガ行者は，日夜，甘露の不断の流れを飲み続ける。
 可視なるものの中に不可視なるものを見るべきである，こうして得難き
 無上〔なる境地を得られる〕。

jīvatā bichāyabā mūṁvāṁ voḍhivā kabahu na hoyabā rogī /
 barasavai dina kāyā palaṭibā yūṁ koī koī biralā jogī // 195 //
 生きているもの（氣息）を下に敷き死んだもの（身体）を覆う者は，決
 して病気になるず。
 誕生日に身体が若返るだろう，このようなヨーガ行者は稀なり。

sūraje ṣāyabā candra soyabā ubhai na pībā pāṁṇī /
 jīvatā kai talī mūṁvā bichāyabā yūṁ bolyā goraṣa bāṁṇī // 196 //
 陽光のなかで食べ月光のなかで眠り，両者のあいだで水を飲んでならな
 い。
 生きているもの（個我）の下に死んだもの（身体）を敷くべし，このよ
 うにゴーラクは語る。

jahāṁ goraṣa tahāṁ gyaṁna garībī dunda bāda nahīṁ koī /
 nisaprehī niradāvai ṣelai goraṣa kahīyai sōi // 197 //
 ゴーラクがいるところに，知識は乏しく，対立と論戦は少しもない。
 切望（渴愛）なく，悪手を使わず遊ぶ（無償の行為を行う）者，それが
 ゴーラク（最高のヨーガ行者）と言われる。

(12)

gigani maṇḍala maim̃ gāya biyāi kāgada dahī jamāyā /
chāchi cham̃ṇi piṇḍatā pīvim̃ sidhām̃ māṣaṇa ṣāyā // 198 //
虚空界で牝牛が仔牛を生み、紙〔の上に〕ヨーグルトができた。
バターミルクを搾ってパンデイットは飲み、スイツダ（成就者）はバター
を食べた。

gūdaṛī juga cyāri taim̃ āi gūdaṛī sidha sād̃hikām̃ calāi /
gūdaṛī maim̃ atīta kā bāsa bhaṇanta goraṣaṇātha machindra kā dāsa
// 199 //

檻褸衣〔を纏った行者〕は四ユガを超えてやって来て、檻褸衣のスイツ
ダは修行法を始めた。
檻褸衣のなかに超越者（スイツダ）の住居がある、とマチンドラの弟子
ゴークナートは説く。

asād̃ha kandrapa biralā sād̃hanta koī sura nara gaṇa gandhrapa
byāpyā bālī sugrīva bhāi /
brahmā devatā kandrapa byāpyā yandra sahaṃsra bhaga pāi // 200 //
制しがたき愛欲は稀なる人のみ制御でき、天・人・半神・ガンダルヴァ
神はバーリとスグリーヴァの兄弟を捕らえた。
ブラフマー神は愛欲に捕らえられ、インドラ神は何千もの女陰を得た。*

* プラーナ神話から原著者が次のように注釈を付けている。すなわち
「愛欲ゆえに猿神スグリーヴァは兄のバーリが悪魔との戦いで死んだ
と思ひ込み兄嫁を自分のものにしたため、生還にしたバーリとスグ
リーヴァは戦うことになった。ブラフマー神はサラスヴァティー女
神と交わり、インドラ神は聖仙ガウタマの妻アハルヤーと愉しんだ
ため、怒ったガウタマはインドラの体に何千もの女陰ができるよう
に呪った」。

aṭhyāsī sahaṃsra raṣisara kandrapa byāpyā asād̃hi viṣṇa kī māyā /
yam̃na kandrapa īsvara mahādeva nātārambha nacāyā // 201 //
8万8千の聖仙の長たちに愛欲がひろがり、ヴィシュヌ神の幻力は〔そ

れを] 制御できなかつた。
この愛欲の主宰神マハーデーヴァ (シヴァ) 神は舞踊を創始した。

viṣṇa dasa avatāra thāpyā asadhi kandrapa jaṭi gorāṣanātha
sādhyā /

jani nījhara jharantā rāṣyā // 202 //

ヴィシュヌ神の10化身がたてられ、制しがたい愛欲は遊行者ゴーラクナー
トによって制せられた。

滝は流れが保たれた。*

*行頭の jani は、ふつう詩語で否定辞である。原著者は、頭頂のサハ
スラーラ・チャクラにある月から流れ落ちる甘露の滝が守られ、太
陽の照射による枯渇から免れた、と解釈しており、jani を訳出して
いない。文脈からすればこの否定辞は不要と考えられるので、原著
者の解釈に従った。

āsati chai ho piṇḍitā nāsati nāmhiṁ anabhai hoyā paratīti nirantari
māhiṁ /

gyāṁna ṣoji ame bigyāṁna pāyā sati sati bhāṣanta sidha sati nātha
rāyā // 203 //

実在論は6〔種類〕だ、パンディットよ、非実在論は無畏なものに映ら
ない、不断〔の流れ〕のなかでは。

知識を求めて私は分別知を得た、と真実のみを語る、真実を成就したナー
トの王は。

mātā hamārī manasā boliye pitā boliye nirañjana nirākāra /

mātā hamārāi atīta boliye jini kiyā piṇḍa kā udhāraṁ // 204 //

われわれの母は意欲と言われ、父は無染・無相と言われる。

われわれの母は超越者と言われ、〔われわれの〕個我の解脱を行った。

(14)

āpā bhām̃jibā satagura bojibā joga pantha na karibā helā /
phiri phiri maniṣā janama na pāyabā kari lai sidha purisa sūm̃
melā // 205 //

自我意識を壊して正師を探すべし、ヨーガ道を軽んじてはならぬ。
輪廻転生して人の生を得ないように、成就者と交わるようにせよ。

thambha bihūm̃ṇī gagana racīlai tela bihūm̃ṇī bātī /
gurū gorāṣa ke bacana patiāyā taba dyaum̃sa nahim̃ tahām̃ rātī //
206 //

柱がなくて虚空ができ、油がなくて蠟燭ができた。
導師ゴーラクのことばを信ずれば、日もなければ夜もない。

ṣaṇḍita gyām̃nī ṣara tara bolai sati kā sabada uchedai /
kāyā kai bali karaṣā bolai bhītari tatta na bhedai // 207 //

生半可な知者はきついことを話し、真実のことばを破壊する。
身体の力をたよりに厳しいことを言い、内奥の真実を区別できない。

mahamām̃ dhari mahamām̃ kūm̃ meṭai sati kā sabada bicārī /
nām̃nhām̃ hoyā jini satagura ṣojyā tina sira kī poṭa utārī // 208 //

威光を持つものとなっても威厳を顕すことなく、真実のことばを思考する。
〔そのような者が〕低頭して正師を求め、頭に担いだ包みを下ろした。

eka kām̃madhyeni bāri sidhi kai gagana ṣiṣara lai bām̃dhī /
lāgi jīva ūpari bāri sidhi kī lyau nirañjana sūm̃ saṁdhī // 209 //

一頭のカーマデーヌがスイツダの戸口におり、〔スイツダは〕虚空の頂
点に連れて行き繋いだ。
個我は柵に囲まれていたが、悉地（成就）を求めて無染なるものに専心
した。*

*前半句の ūpari bāri の意味が判然としないので、原著者の解釈に従った。

āphū śāya bhāṅgi bhasakāvai tā maiṁ akali kahāṁ taim āvai /
 caṛhatāṁ pitta ūtaratāṁ bāi tātaiṁ goraṣa bhāṅgi na śāi // 210 //
 アヘンを摂りバーング（タイマ）を食する者に、どこから知性が生まれるのか。

ピッタが増えてヴァーユが減るので、ゴーラクはバーングを食べない。*

*ピッタはアーユルヴェーダが説く人体の健康状態を制御する3要素（気質、気力）のうちの一つで、胆汁・火の気質をいう。ここの翻訳ではヴァーユとなっているもう一つの要素は述語ではヴァータといふ風・空気の気質を指し、もう一つのカバは粘液・水の気質を指す。

mindara chāḍai kuṭi bamdhāvai tyāgai māyā aura maṁgāvai /
 sundari chāḍai nakaṭi bāsai tātaiṁ gorakha alagai nhāsai // 211 //
 家を捨てて庵を結び、マーヤー（妄念）を捨てても、〔食を〕求める。
 美女を捨てて破廉恥女とともに住む、これらからゴーラクは離れて歩む。

triyā na svānti baida na rogī rasāyaṇi ara jāci śāya /
 būḍhā na jogī sūrā na pīṭhi pāchaim ghāba yatanām na mānaim
 śrīgoraṣarāya // 212 //
 女が大人しくなく医者が病人ではない〔のだが〕、錬金術師はもっと乞うて食す。
 ヨーガ行者は老いず勇者の背に傷はない、〔もしそうでなければかれらを〕聖ゴーラク王は認めない。

haṇḍa brahmaṇḍa cahorīyā mānūṁ besyā anna /
 koī koī korara raha gayā yūṁ bhāṣai nātha rataṁna // 213 //
 〔調理用の〕土壺にブラフマーング（「梵卵」、世界）が載っている、まるで娼婦の食物のように。
 誰も〔それから〕逃れられなかったと、ラタン・ナートは語る。*

*一行目を原著者は「全世界は、マーヤー（幻力）によって支配され

(16)

ている」と解釈している。「ラタン・ナート」は、ナート派の古典的研究書である Hazārīprasād Dvivedī, *Nāth Sampradāy*, Varāṇasī: Naivedya Niketan, 1966 (1st. ed. 1950), p.187.によると、バルトリハリの弟子でパーシャーワル（現パーキスターン）に住し、ムスリムのヨーガ行者の間に信奉者が多く、彼に係わる聖地がカールとジャラーラーバードにある。

nindrā supanaiṁ binda kūṁ harai pantha calaṁtāṁ ātamāṁ marai /
baiṭhāṁ ṣaṭapaṭa ūbhāṁ upādhi gorakha kahai pūtā sahaja samādhi
// 214 //

睡眠は夢のなかでビンドウ（精液）を壊し、道を歩んでアートマンは疲労する。

坐っていれば不仲が生じ立っていれば騒ぎとなる、ゴーラクは言う、息子よ、本然なる三昧に住せ。

sūkai kaṭha aru bhūṣa santāpai deha bisara ara nindrā byāpai /
budhi bina bakai vikala hoyā jāya tātaiṁ goraṣa bhāṅgi na ṣāya //
215 //

のどが渴き飢えに苦しみ、肉体は意識がなくなり眠気がひろがる。統覚なく喚き散らし落ち着きがなくなる、それゆえゴーラクはタイムを食べない。

rūsātā rūṭhā golā rogī bholā bhachika bhūṣā bhogī /
goraṣa kahai sarabaṭā jogī yatanāṁ maiṁ nahīṁ nipajai jogī // 216 //
不機嫌な者は怒ってヴァータ（風・空の病素）の病気となり、ただの大食漢は飢えた享樂者〔となる〕。

ゴーラクは言う、結髪した〔きとんとした〕ヨーガ行者、努力しても〔そのような〕ヨーガ行者は生まれない。

avadhū ahāra kūṁ torībā pavana kūṁ moḍibā jyaṁ kabahu na
hoyabā rogī /
chaṭhai chamāsī kāyā palaṭanta nāga baṅga banāsapatī jogī // 217 //

アヴァドゥーよ、食を抑制し氣息を調えれば、けっして病気にならぬ。
時折、身体を若返らせよ、鉛と錫と薬草を用いて、ヨーガ行者よ。

sūrām kā pantha hāsyām kā bisarāma suratā lehu bicārī /
aparacai piṇḍa bhiṣyā śāta hai anti kāli hoyagī bhārī // 218 //
勇〔敢なる修行〕者の道、笑われ者の休憩、聴衆よ、よく考えてみよ。
〔真実在を〕直証できなかった身体は乞食を食し、最期は重くなる。

ulaṭī sakati caṛhai brahmaṇḍa naṣa saṣa pavanām ṣelai sarabaṅga /
ulaṭī candra rāha kūm grahai sidha saṅketa jāṭī gorāṣa kahai // 219 //
逆流するシャクティがブラフマーンダに昇れば、爪先から頭頂まで全身
に氣息が遍満する。
逆さの月（サハスラーラ・チャクラにある甘露の源）が太陽を捉えれば、
〔これが〕成就のしるしと遊行者のゴーラクは言う。

dhare adhar bicārīyām dharī yāhī maiṁ soya /
dhare adhara paracā hūvā taba dutiyā nāhīm koya // 220 //
下（五大所成の身体）のなかに上（五大要素を超えた至高のブラフマン）
を尋求すれば、それを、まさにここ（下）に捉えた。
下のなかに上を直証できれば、いかなる二元もない。

jibhyā indarī ekaiṁ nāla jo rāṣai so bañcai kāla /
paṇḍita gyāṁnī na karasi garaba jibhyā jīṭī jina jītyā saraba // 221 //
舌の器官を唯一〔の至高のブラフマン〕と一つにすれば、カーラ（死
神）を欺ける。
パンディトと知者は驕るな、舌を抑えた勝者はすべてに勝利する。

gorakha kahai hamārā ṣaratara pantha jibhyā indrī dījai bandha /
loga jugati maiṁ rahai samāya tā logī kūm kāla na śāya // 222 //
ゴーラクは言う、われわれの道はとても厳しい、舌の器官を縛っておれ。
〔ヨーガの〕方法になれた人々を、カーラが冒すことはない。

(18)

baraṣa eka dekhilai ho paṇḍitā tata eka cīnhibā sabadaim̐ surati
samāi /

gorakhanātha bolai bhrama na bhūliba re bhāi // 223 //

一本の木を見よ、パンディットよ、そこに、ことば (śabda) の中に天
啓 (śruti) が収まっている一つ徴を見いだせ。

ゴーラクナートは言う、誤謬に陥ってはならぬ、兄弟よ。

abūjhi bujhilai ho paṇḍitā akatha kayhilai kahām̐ñī /

sīsa navām̐vata satagura miliyā jāgata raiṁṇa bihām̐ñī // 224 //

不可知なことを理解せよ、パンディットよ、語られざる物語を語れ。

低頭すれば正師が得られ、中夜・後夜と目覚めている。

vidyā paṛhi ra kahāvai gyām̐ñīm̐ binām̐ avidyā kahai agyām̐ñī /

pama tata kā hoyā na maramī goraṣa kahai te mahā adharamī //

225 //

知識を学んで知者と言われ、無知でなくても愚者と言われる・

至高の真実の急所を知らなければ、ゴーラクは言う、その者は大いなる
不正義者だ。

pantha cale calī pavanām̐ tūṭai tana chījai tata jāi /

kāyā taiṁ̐ kachū agama batāvai tākī mūṁḍūṁ̐ māi // 226 //

道を歩み息が途切れ、肉体が衰えて真実を失う。

身体によって〔真実在に〕少しも到達できないと言う者は、その者の頭
は剃ってやろう、母よ。

mahamanda mahamanda na kari kājī mahamanda kā bauhota

bicāram̐ /

mamahanda sāthi paikanbara sīdhā ye laṣa aji hajāram̐ // 227 //

ムハンマド、ムハンマドと〔だけ〕言うな、法官 (カーズィー) よ、ム
ハンマドの思索は多大なり。

ムハンマドとともに使徒たちは修行した、これら18万人の〔使徒たちは〕。

jīva sīva saṅge bāsā badhi na ṣāibā rudhra māsā /
 haṃsa ghāta na karibā gotam̐ kathanta goraṣa nihāri potam̐ // 228 //
 個我はヴァ神とともに住す、〔それゆえ生類を〕屠り血・肉を食すな。
 一族を窒息させるな、ゴラクは語る、子孫を〔一切生類と同じと〕見
 なせ。

jīva kyā hatiye re pyaṇḍa dhārī mārī lai pañcabhū mragalā /
 carai thārī budhi bārī joga kā mūla hai dayā dāṇa /
 kathanta goraṣa mukati lai mānavā mārī lai rai mana drohī /
 jākai bapa barana māsā nahim̐ lohī // 229 //
 個我（生命）を殺すのか、肉体を持つものよ、五大所成の〔意という〕
 鹿を殺せ。
 〔その鹿は〕おまえの統覚という家をはんでいる、ヨーガの根本は憐憫
 の布施なり。
 ゴラクは語る、人間よ、解脱を求めてこの意という反抗者を殺せ。
 〔その意の〕肉体、色、肉、血はない。

jini mana grāse deva dāṇa so mana mārile gahi guru gyām̐na
 bām̐ṇa // 230 //
 神・悪魔を捉えたその意を、導師の智慧の矢が射貫いた。

jogī so jo rāṣai joga jibhyā yandrī na karai bhoga /
 añjana choḍi nirañjana rahai tākū goraṣa jogī kahai // 231 //
 ヨーガ行者はヨーガを守る者であり、舌〔などの〕感官〔の対象〕を享
 受しない。
 ぜんま
 染汚を捨て無染である者、それをゴラクはヨーガ行者と言う。

sum̐ni ja māi sum̐ni ja bāpa sum̐ni nirañjana āpai āpa /
 sum̐ni kai paracai bhayā sathira nihacala jogī gambhīra // 232 //
 空こそが母、空こそが父、空はそれ自体無染なり。
 空の覚知が成ずれば、ヨーガ行者は堅固で不動であり甚深なり。

(20)

tajau kulatī meṭau bhaṅga aha nisi rāṣau ojuda bandhi /
saraba sañjoga āvai hāthi guru rāṣai nirabāṇa samādhi // 233 //
粗末な豆を捨て、タイム〔の癖〕を消せ、昼夜、身体を抑制せよ。
〔こうして〕完全なるヨーガ〔の成就〕は手に入り、導師が涅槃三昧を
護ってくれる。

akuca kuḥiya bigasiyā pohā sidhi parijali uṭhī lāgiyā dhuvā /
khai goraṣanātha dhuvā prāṇa aise piṇḍa kā paracā jānai prāṇa //
234 //
拡散した意を〔制感によって〕収斂し、開いた花を〔輪に〕結んで、成
就が輝き、煙が発ち始めた。
ゴーラクナートは言う、煙は氣息なりと、かくして身体の完成は氣息に
よって知られる。

avadhū yo mana jāta hai yāhī tai saba jāṁṇi /
mana makaṛī kā tāga jyūṁ ulaṭi apūṭhau āṁṇi // 235 //
遁世者よ、この意は動きつつある、まさのここからすべてのものが生ま
れる。
意は蜘蛛の糸のよう、〔意を〕連れ戻せ。

je āsā to āpadā je saṁsā to sogā /
gura muṣi binā na bhājase goraṣā ye dūnyom̐ baṛa roga // 236 //
期待があれば危難に遭い、疑心があれば悲しむ。
師資面授なければ逃れず、ゴーラク〔は言う〕、これら二つの大きな病
（期待と疑念）は。

isa ojudā maiṁ māri lai gotā kachu magaja bhītari ṣyāla rai /
pañca kaṭāra hai bhītari nimasa kari behāla rai // 237 //
この身体の中に潜ってみよ、頭のなかに少し考える力があるならば。
五〔知覚器官を殺すため〕の両刃の短剣が内部にある、瞬時に〔感官を〕
停止させよ。

byanda byanda saba kōi kahai mahābyanda koi biralā lahai /
 iha byanda bharose lāvai bandha asathiri hota na deṣo kandha //
 238 //

ビンドウ，ビンドウと人みな言う，〔しかし〕マハー・ビンドウを稀なる人のみ捉える。
 このビンドウ（精液）を頼りにバンダ（制御）をしても，見よ，身体は不動ではない。

ulaṭai mūla ḍāla nahīm̐ rahai phāri kachoṭā rātyauṃ bahai /
 na voha chījai nā voha galai byanda nahīm̐ so bhagabhuṣa ḍhalai //
 239 //

逆さまの根に枝はなく，禪衣を破って，夜，漏れ出る。
 それは弱らず，それはとろけない，ビンドウでなければ，女陰の口に墜ちる。*

*この詩句全体の意味は判然としない。原著者は翻訳をしておらず，精液の漏出を防ぐことと同時に至高の境地の覚知の必要性が説かれているとの解釈を述べるに留まっている。

biṇi baisandar joti balata hai gura prasāde dīṭhī /
 svāmī silā aluṇī kahiye jini cīnhā tina dīṭhī // 240 //

炎なく光が輝いている，導師の恩寵によって見えた。
 領主よ，落ち穂は美味しくない，〔そのことを〕見極めた者に〔光輝が〕見えた。

ūjala mīna sadā rahai jala maim̐ sukara sadā malīnā /
 ātama gyāṃna dayā biṇi kachu nāhīm̐ kahā bhayu tana ṣīṇā // 241
 //

魚は水に住んで常に清く，豚は〔汚泥に住んで〕常に汚れている。
 アートマンの知識がなくは何もならず，肉体を〔苦行によって〕細らせて何になった。

(22)

dhotarā na pīvo re avadhū bhāngi na ṣāvau re bhāi /
goraṣa kahai suṇo re avadhū yā kāyā hoyagī parāi // 242 //
チョウセンアサガオ〔の実〕を飲むな、遁世者よ、タイムを食すな、兄
弟よ。
ゴークは言う、聴け、遁世者よ、この身体は他人のものとなる。

sāmi sahelī suta bharatāra saraba sisaṭi kau ekau dvāra /
paisatā purisa nikasatā pūtā tā kāraṇi goraṣa avadhūtā // 243 //
主人、女友達、子供、兄弟すべて一つの門から生まれる。
〔その門に〕男が入り〔その門から〕子供が出てくる、それゆえゴーク
は遁世者〔となった〕。

rāṣyā rahai gamāyā jāya sati sati bhāṣanta śrī goraṣārāya /
yekai kahi dusarai mānī goraṣa kahai vo baṇom gyāni // 244 //
〔ものは護れば〕残り無駄に使えばなくなると、真実のみを聖ゴーク
王は語る。
一つのことを言って別の意味を知れば、ゴークは言う、その者は偉い
知者だ。

cyanta acyanta hi upajai cyantā saba juga ṣiṇa /
jogī cyantā bīsarai tau hōi acyantahi līna // 245 //
思慮は不可思議を生み、思慮は全てのユガ（劫期）を減じる。
ヨーガ行者は思慮を忘失し、不可思議〔なる真実在〕に沈潜する。

girahī ko gyāṁna amalī ko dhyāṁna būcā ko kāna beṣyā ko māna /
bairāgī ara māyā syūṁ hātha yā pāñcām ko eko sātha // 246 //
家住者の知識、商人の注意深さ、耳のない者の耳、娼婦の自尊心。
離欲者がマーヤー（幻影）に手を出すこと、これら五人はみな同じ（非
実在）。

girahī hoyā kari kathai gyāṁna amalī hoyā kari dharai dhyāna /
bairāgī goya karai āsā nātha kahai tīnyom ṣāsā pāsā // 247 //

家住者としては知識を語り，商人としては注意深さを保つようになる。

離欲者としては〔マーヤーへの〕期待を抱くようになる，ナートは言う，〔これら〕三者は特に束縛されていると。

rām̐ḍa muvā jatī dhāye bhojana satī dhana tyāgī /
nātha kahai ye tīnyau abhāgī // 248 //

女が死んでヨーガ行者は走り周り，食物〔を求めて〕出家者〔となり〕
財〔を捨てて〕放棄者〔となる〕。

ナートは言う，これら三者は不運者なりと。

par̐hi par̐hi par̐hi ketā muvā kathi kathi kathi kahā kīnha /
bar̐hi bar̐hi bar̐hi bahu ghaṭa gayā pārabrahma nahīm̐ cinha // 249 //

読み読み読んでなんと多くの人が死に，語り語り語って何をなしたか。
増やし増やし増やして多くが減り，至高のブラフマンを〔誰も〕判らな
かった。

sati sati bolai gorāṣa rānā /
tīni jaṇai kā saṅga nivārau nakaṭā bucā kāṇā // 250 //

真実の真実を語る，ゴーク王は。

三者との随伴を辞めよ，鼻のない者，耳のない者，目のない者。*

*原著者は，ほんとうに離欲の心からではなく，身体不自由のために
ヨーガ行者になった人たちとの交わりを捨てるべきであると，解釈
している。

kade na sobhai sundarī sanakādika ke sāthi /
jaba taba kalaṅka lagāisī kālī hām̐ḍī hāthi // 251 //

美女は，サナカなど〔の四兄弟〕と一緒にではけっして輝かない。
いつでも汚れが付く，〔煤で〕黒くなった調理壺を手〔取れば〕。

(24)

pāsi baiṭhī sobhai nahīm̃ sāthi ramāi bhuṇḍi /
goraṣa kahai asatarī kahā salaha kaha muṇḍi // 252 //

傍に坐っていて似合わない、いっしょの魅せられた醜女は。
ゴータクは言う、〔その〕女は正直に言った、剃頭した女がなんと。*

*原著者がここにほとんど解釈を加えていないので、意味が判然としない。

jaraṇā jogī jugi jugi jīvai jharaṇā mari mari jāya /
ṣojai tana milaiṃ avināsī agaha amara pada pāya // 253 //

老練なヨーガ行者はユガ（劫期）を超えて生き、〔精液を〕漏出する者は死んでしまう。
身体のなかに不壊なるものを探す者は、得難き不死の境地を得る。

japa tapa jogī sañjama sāra sāle kandrapa kīyā chāra /
yehā jogī jaga maiṃ joya dūjā peṭa bharaī saba koya // 254 //

念誦、苦行、制御の精髓〔を理解し〕、若い時代に情欲を焼き尽くした者は。
まさにこの者は世界でヨーガ行者と知られるが、他の者はみな腹を満たすのみ。

jogesara kī ihai parachyā sabada bicāryā ṣelai /
jitnā lāika bāsaṇā hovaiṃ tetau tāmai melham̃ // 255 //

ヨーガの自在者の吟味は、かれがことばを考察し使えるかである。
適した器があればあるだけ、それらに〔知識を〕注ぎ込め。

cāpi bharaī to bāsaṇa phūṭai bārai rahai tau chījai /
basata ghaṇerī bāsaṇa vohā kaho gura kyā kījai // 256 //

押し込めば器は壊れ、〔器に入れず〕外に置いておけば壊れてしまう。
物が多すぎて器は小さい、導師よ、どうしたらよいか。

avadhū sahajai laiṇā sahajai daiṇā prīti lyau lāi /
 sahajai sahajai calaiḡā rai avadhū tau bāsaṇa karaigā samāi // 257 //
 遁世者よ、自然に〔弟子の迷妄を〕取り除き自然に〔智慧を〕授ければ、
 愛着が湧く。

自然に、自然に行えば、遁世者よ、器は〔すべてを〕収められよう。

tūmbī maim̃ tiraloka samāyā tribeṇī riba candā /
 būjhaō re brambha giyānī anahada nāda abhaṅgā // 258 //
 瓢箪（容器）に三界，三川，太陽，月が収まった。
 理解せよ，ブラフマンを知る者よ，不滅の奏でられざる音を。

satyo sīlam̃ doya asanāṁna tritīye gura bāyaka /
 catrathe ṣīṣā asanāna pañcame dayā asanāna /
 ye pañca asnāna niramalā niti prati karata gorakha bālā // 259 //
 〔第一に〕真実の誓戒，第二に沐浴，第三に導師の教えを守ること。
 第四に弟子への灌浴，第五に哀愍の灌浴。
 これら五つの清浄なる灌浴を，偉大なゴーラクはつねに行ずる。

triyājīta te puriṣā gatā mili bhānanta te puriṣā gatā /
 bisāsaghātāḡi puriṣā gatā kāyarau tata te puriṣā gatā /
 abhaṣa bhaṣante puriṣā gatā sabada hīṇa te puriṣā gatā /
 udika rāṣanta te puriṣā gatā para triyā rācanta te puriṣāgatā /
 sati sati bhāṣata goraṣa bālā itanā tyāḡi raho nirālā // 260-261 //
 女の魅惑に陥る男は破滅に至り，〔他者を〕破る男も破滅した。
 信頼を裏切る男は破滅し，臆病によっても男は破滅した。
 食べてはならぬ物を食べて男は破滅し，〔真実の〕ことばのない男も破
 滅した。

偉大なゴーラクは真実の真実を語る，このように独り離欲者であれ。

paṇḍita bhaṇḍita ara karavārī palaṭī sabhā bilkalatā nārī /
 apaḍha bipara joḡī gharabārī nātha kahai rai pūtā inakā saṅga
 nibārī // 262 //

(26)

軽蔑されたパンディットと糸紬女、ひっくり返った集会、身体不自由な女性。

無学のブラーフマン、家住のヨーガ行者、ナートは言う、息子よ、かれらとの交わりを避けよ。

rāti gāi adha rāti gāi bālaka eka pukarai /
hai koī nagara maiṁ sūrā bālaka kā duḥkha nibārai // 263 //
夜が過ぎ、半夜が過ぎたと、一人の少年が叫ぶ。
街に誰か勇者はいるか、〔この〕少年の苦悩を取り除く。

disaṭi parai te sārī kīmati kīmati sabada ucāraṁ /
nātha kahai agocara bāṇī tākā vāra na pāraṁ // 264 //
視線が落ちた物が高価である、高価なものは発せられたことば。
ナートは感官を超えたことばを語る、その際限はない。

sabada hamārā śaratara śaṅḍā rahaṇi hamārī sācī /
leṣai liṣi na kāgada māḍī so patrī hama bācī // 265 //
わたしのことばは鋭い両刃の剣、わたしの行いは〔ことばに〕忠実。
文に書かれず紙にも書いていない、そのような手紙をわたしは読んだ。

mana bāṁdhūṁgā pavana syūṁ pavana bāḍhūṁgā mana syūṁ /
taba bolaigā kovata syūṁ /
mana terī kī māi mūṁḍū pavanā daūṁ ra bahāi /
mana pavana kā gama nahīṁ tahāṁ rahai lyau lāi // 266 //
〔わたしは〕 ころを氣息に結びつけ、氣息を心に結びつけよう。
その時、力ある〔ことば〕が発するだろう。
心よ、おまえの母を剃髪しよう（弟子にしよう）、氣息を注入しよう。
心と氣息が届かないところ、そこに〔わたしは〕精神集中している〔から〕。

koṇa desa syūṁ āye jogī kahā tumhārā bhāva /
kauṇa tumahārī bahaṇa bhāṇajī kahāṁ dharogo pāva // 267 //

どこの国からやって来たのか、ヨーガ行者よ、どこへ行くつもりなのか。
誰がおまえの姉妹、姪（姉妹の娘）か、どこに足を置くのか。

pachima desa syūm̐ āye jogī utara hamārā bhāva /
dharatī hamārī bahāṇa bhāṇajā pāpī ke siri pāva // 268 //
西方の国からやって来た、〔わたし〕ヨーガ行者は、来たに行くつもり
だ。

大地がわたしの姉妹、姪で、罪人の頭に足〔を置く〕。*

*原著者は、次のような解釈を施している。すなわち「わたしはマー
ヤーの国からやって来た。ブラフマンの真理に達するのが目的であ
る。クンダリニーがわたしの姉妹・姪であり、わたしは罪人を滅ぼ
している。家住者は姉妹・姪に布施をし、ヨーガ行者はそれに乞食
をする。クンダリニーはシャクティそのもの、すなわちマーヤーで
ある。家住期の面倒な事柄がマーヤーをますます粗大なものにして
ゆき、そのためクンダリニーは眠ってしまう。マーヤーの粗大さを
滅ぼし、ヨーガ行者はクンダリニーを覚醒させる。マニプーラ・チャ
クラにクンダリニーは眠っている状態にある。マニプーラ・チャク
ラとそれに接しているクンダリニーを、ここでは大地と表現してい
る」。

sakati ahairai misa ridha kosa bala syūm̐ bāgo /
goraṣa kahaim̐ cālātī mārūm̐ kāna gurū tau lago // 269 //
シャクティは狩人〔となって〕神通力を口実に（求めて）、胎に力をい
れて手綱〔を振るった〕。
ゴーラクは言う、〔わたしは〕動いている〔獲物〕を仕留めよう、導師
に入門した〔のだから〕。

nātha kahai merā dūnyaum̐ pantha pūrā jata nahim̐ tau sata kā
nīsūrā /
jata sata kiriyā rahaṇi hamārī aura bali bākali devi tumhārī // 270 //
ナートは言う、私の二つの道（方法）は完璧だ、〔身体の〕調御がなけ

(28)

れば〔堅固な〕信心の勇者はいない。
調御と信心の動作がわれわれの日常行儀だ、そして女神よ、雌山羊の供儀がおまえの〔日常儀礼〕だ。

kathaṇī kathai so siṣa boliye veda parḥai so nātī /
rahaṇī rahai so gurū hamārā hama rahatā kā sāthī // 271 //
物語を語る者は弟子と言えるが、ヴェーダを読む者は孫（劣った者）。
日常行儀を守っている者はわれわれの導師、われわれはその同行者。

rahatā hamārai gurū boliye hama rahatā kā celā /
mana mānai tau saṅgi phirai nahitara phirai akelā // 272 //
日常行儀を守る者はわれわれの導師と言われ、われわれはその弟子。
心が求めれば〔導師と〕ともに廻り、そうでなければ道を独り巡る。

darasaṇa māi darasaṇa bāpa darasaṇa maḥim̃ āpai āpa /
yā darasaṇa kā koī jāṇai bheva so āpai karatā āpai deva // 273 //
ダルシャナ（耳環）は母、ダルシャナは父、ダルシャナのなかに自身が
〔いる〕。
このダルシャナの秘密を知る者は、自ら創造者であり神である。

jini jānyā tini ṣarā pahaicāṇyā vā aṭala syūm̃ lo lāi /
goraṣa kahai amem̃ kānām̃ suṇatā so am̃ṣyām̃ deṣyā rai bhāi // 274 //
知っている者は本物を識別し、その者は不動の姿勢で精神集中する。
ゴークラは言う、自ら耳で聞こえたものが目で見えた、兄弟よ。

baithām̃ bārai calata aṭhārai sūtām̃ tūṭai tūsa /
kaithana karām̃tām̃ causaṭi tūṭai kyaum̃ bhajivau jagadīsa // 275 //
坐して12〔回〕、歩いて18〔回〕、30〔回で〕糸が切れる。
何頭もの雌牛の乳搾りをして64〔回〕が切れて、どうして世界主を礼拝
できよう。*

*原著者の解釈によれば、ここに表現された数字はヨーガ行における

調息に係わる数字であるが、どのような調息法なのかは具体的には分からない。二行目前半句の原語 *kaīthana* も Hīndī śabda sāgara に記載がないが、訳者は *kaī thana* と分節して読んだ。

nāsikā agre bhrū maṇḍale ahanisa rahibā thīraṁ /
mātā garabhi janama na āyabā bahuri na pīyabā ṣīraṁ // 276 //

鼻端に、眉間に、昼夜〔視線を〕固定しておれ。

母の胎に生まれることはなくなり、再び乳を飲むことはない。